慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	井口樹生教授略年譜・業績
Sub Title	Biography and publications of Tatsuo Iguchi
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

井口樹生教授　略年譜・業績

略年譜

昭和九年（一九三四）　数え年一歳

○五月八日、東京都豊島区要町一丁目四七番地二（現在要町一丁目三三番地）に、父井口長次（山手樹一郎）、母ヒデの次男として生まれる。

昭和一三年（一九三八）　五歳

○四月、長崎若葉幼稚園に入園。

昭和一六年（一九四一）　八歳

○四月、東京第二師範附属豊島国民学校に入学。　○十二月八日、大東亜戦争（太平洋戦争）開戦。校庭で放送を聞く。

昭和一九年（一九四四）　一一歳

○八月下旬、山形県上ノ山の月岡ホテルに集団疎開。四年生。

昭和二〇年（一九四五）　一二歳

○五月、上ノ山より東村山郡西郷村字小穴の蓬莱寺へ再疎開。　○八月十五日、終戦の詔勅を手伝い先の農家で聞く。　○一一月二日、疎開地より帰京。

昭和二二年（一九四七）　満一三歳

○四月、東京開成中学校に入学。
昭和二五年（一九五〇）　一六歳
○四月、東京開成高等学校に進学。
昭和二八年（一九五三）　一九歳
○四月、慶應義塾大学文学部に入学。　○九月三日、折口信夫、逝去。
昭和二九年（一九五四）　二〇歳
○四月、国文学専攻に籍を置く。「原典購読（伊勢物語）」で、池田彌三郎先生の授業を始めて受く。
昭和三一年（一九五六）　二二歳
○五月、休学し、京都に遊ぶ。北白川、紫楽荘に滞在。
昭和三二年（一九五七）　二三歳
○四月、復学する。
昭和三三年（一九五八）　二四歳
○四月、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程国文学専攻に入学。父、池田先生に私をお預けする旨、ご挨拶に先生宅へ伺う。　○九月、始めて、折口信夫先生のお墓へ先生に誘われる。
昭和三四年（一九五九）　二五歳
○四月、慶應義塾中等部授業嘱託となる（三五年度まで）。
昭和三六年（一九六一）　二七歳

○三月一一日、肺結核のため慶應義塾大学病院四号棟五一三号室に入院。修士課程修了。　○九月、特別病棟に移り、遠藤周作氏の値遇を得る。

昭和三七年（一九六二）　二八歳

○三月、慶應病院退院。なお自宅療養。　○夏、軽井沢で療養。

昭和三八年（一九六三）　二九歳

○四月、慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程国文学専攻に入学。指導教授、久松潜一先生。　○一〇月二五日、折口信夫博士記念奨学金第一号を受く（翌年第三号）。　○一一月二日、奈須野和子と結婚。

昭和三九年（一九六四）　三〇歳

○四月、上智大学文学部非常勤講師。　○この年より指導教授、池田先生。

昭和四〇年（一九六五）　三一歳

○四月、佐藤春夫氏の慶應義塾大学における久保田万太郎記念講座「わが詩学」の助手役を務めるも、五月六日、急逝される。

昭和四一年（一九六六）　三二歳

○四月、上智大学文学部助手。

昭和四二年（一九六七）　三三歳

○四月、慶應義塾大学国際センター非常勤講師（四四年まで）。

昭和四三年（一九六八）　三四歳

○三月、慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程、単位取得退学。　○四月、上智大学文学部専任講師。

昭和四四年（一九六九）　三五歳

○五月、豊島区千川町一丁目五番地（現在、千川一ノ一ノ一九）に転居。

昭和四五年（一九七〇）　三六歳

○四月、慶應義塾大学文学部非常勤講師（五一年三月まで）。

昭和四六年（一九七一）　三七歳

○四月、上智大学文学部助教授（五一年三月まで）。

昭和五一年（一九七六）　四二歳

○三月二日、久松潜一先生逝去。　○四月、慶應義塾大学文学部助教授。上智大学文学部非常勤講師（五二年三月まで）。

昭和五二年（一九七七）　四三歳

○四月、慶應義塾大学文学部教授。

昭和五三年（一九七八）　四四歳

○三月一六日　父、永眠。　○七月九日、盲腸・腹膜炎のため日本大学板橋病院に入院、手術。　○八月一一日、退院。

昭和五四年（一九七九）　四五歳

○七月二日、腸癒着のため日本大学板橋病院に入院。一〇日、退院。

昭和五五年（一九八〇）　四六歳

○三月、池田先生、慶應義塾大学を定年退職。洗足学園魚津短期大学に移られる。　○四月、慶應義塾大学大学院文学研究科委員会委員になる。

昭和五七年（一九八二）　四八歳

○七月五日、池田彌三郎先生逝去。　○八月三〇日、ラジオ日本「美しい日本語」、二回分録音。九月七日、十四日放送。

昭和五九年（一九八四）　五〇歳

○四月、洗足学園魚津短期大学講師。「源氏物語」を講ず（六一年度を除き平成八年三月まで）。　○五月九日、院生、ゼミ学生と鎌倉霊園の池田先生のお墓に詣ず。以後、毎年恒例となる。　○一〇月一一日、ラジオ東京「正しい日本語（まちがって使われやすいことば）」、四回分録音。

昭和六一年（一九八六）　五二歳

○三月三日、ＮＨＫラジオ第二放送「桜と日本人（やすらい花）」録音。山田宗睦氏のゲスト。四月九日放送。　○四月一日、特別研究休暇に入る。京都やすらい祭り・四天王寺・住吉大社、壱岐・対馬、瀬戸内海の島々、東北、佐渡、花祭り・雪祭りなどを採訪する。

昭和六二年（一九八七）　五三歳

○四月、特別研究休暇あける。実践女子大学美学美術史専攻講師。「民俗学概論」を講ず（六三年三月まで）。上代文学会理事（現在に至る）。民俗芸能学会編集委員（六三年三月まで）。　○六月一五日、母、永眠。

昭和六三年（一九八八）　五四歳

○三月二十七日、浜松中日センター「万葉集講座（万葉のフォークロア）」を講ず。以降、四回。　○七月四日、ジャパンFMで「FMさわやかスタジオ・夏の特集・今考えてみよう日本語」五回分録音。　○同月二一日、文部省より依頼を受け、昭和六十三年度初任者研修講師として、ニューゆうとぴあ号で沖縄那覇へ行く。講義「文学に見る自然」。二十四日、那覇着。

平成元年（一九八九）　五五歳

○五月二二日、東京第一弁護士会・文化講演会で「日本語の中の日本人」を講演。　○七月一九日、肺癌の加藤守雄氏をご自宅に見舞い、折口信夫先生の色紙、短歌草稿、愛用の硯をいただく。一〇月二六日には、折口先生のお着物をいただく。　○一〇月一日、朝日カルチャー千葉の講師となり「古事記」を講ず。以降平成四年にかけて、「伊勢物語」、「日本霊異記」を講ず。　○一二月二六日、加藤守雄氏、逝去。

平成二年（一九九〇）　五六歳

○一〇月七日、和歌文学会代表幹事となる。

平成三年（一九九一）　五七歳

○三月七日、学位論文審査をうけ、可決。文学博士となる。　○七月一二日、フジテレビ「クイズ年の差なんて」の正解者となり、「ハリコノトラ」録画（以降平成五年まで）。　○一一月六日、久保田万太郎記念資金委員となり同委員会に出席（以降十一年六月まで）。

平成四年（一九九二）　五八歳

○六月二七日、慶應義塾大学国文学研究会「池田彌三郎先生生十年祭」で講演。後、山食で小パーティーを主催す。○一〇月二四日、和歌文学会で「節会と歌謡及び和歌」を講演。代表幹事解任。

平成五年（一九九三）　五九歳

○四月六日、NHKラジオ・フレアイラジオパーティー「桜を歌う」に生出演。　○六月一二日、全国大学国語国文学会評議員となる。　○九月二一日、鴨下信一君、小要賢昭君と『文芸春秋』「同期生」の写真撮影。　○九月二三日、昭和薬科大学諏訪教室で「薬と古代国文学」を講演。　○一〇月三〇日、民俗芸能学会で盛岡に行き、理事となる。　○一一月二六日、慶應義塾大学芸文学会委員長に就任（平成九年六月まで）。

平成六年（一九九四）　六〇歳

○一月二二日、西脇順三郎先生生誕百年祭行事講演会の司会を務める。　○六月八日、折口信夫全集改訂版の編集会議に出席。以降、編集委員となり現在に至る。　○一一月二七日、民俗芸能学会を慶應義塾大学で開催。後、理事解任。

平成七年（一九九五）　六一歳

○七月一七日、日本大学板橋病院に入院、翌一八日、回盲部切除（大腸三〇センチ）。三一日、退院。　○九月一二日、妻和子、子宮体癌のため準広汎子宮全摘出手術を受く（以降、一一年一月まで抗癌剤投与を受く）。

平成八年（一九九六）　六二歳

○八月二九日、遠藤周作氏昇天。十月二日、遠藤氏の葬儀に参列。

平成九年（一九九七）　六三歳

○四月、清泉女子大学大学院博士課程非常勤講師となる（平成一一年三月まで）。　○六月一三日、藤原茂樹君が来宅し、神戸山手女子短期大学が四年生学部を作るに当たり、慶應定年後の就任を要請。一週間後、承諾。　○一二月一五日、慶應義塾大学病院に胃癌のため入院。

平成一〇年（一九九八）　六四歳

○一月六日、胃三分の二の摘出手術を受く。二三日、退院。　○一一月二二日、豊島区要町一丁目三三番地三に転居。

平成一二年（二〇〇〇）

三月、慶應義塾大学定年退職。

業績一覧

〔著書〕

植物故事　風の木水の花　三友社　昭和48年10月

くらしの季節〈日本人の民俗2　年中行事〉　実業之日本社　昭和51年7月

日本語の常識非常識　講談社　昭和61年7月

日本語の履歴書　講談社　昭和62年9月

古典の中の植物誌　三省堂　平成2年2月

境界芸文伝承研究　三弥井書店　平成3年10月

ことわざ万華鏡　小池書院　平成7年12月

いい日本語、ちょっとうまい使い方　講談社　平成7年12月

誰もが「うっかり」誤用している日本語の本　講談社　平成11年7月

〔監修本〕

知っているようで知らない日本語（4）　ゴマブックス　昭和63年4月

知っているようで知らない日本語（5）　ゴマブックス　昭和63年6月

どちらが正しい？　ことわざ2000　講談社　平成7年7月

〔論文〕

上代における関についての研究　『国文学論叢第4輯・上代文学　研究と資料』　至文堂　昭和36年4月

筋馬考　『藝文研究』第20号　昭和40年10月

炎よりの誕生　上智大学『国文学論集』第1号　昭和43年3月

「さかほかひ」の要因　上智大学『国文学論集』第2号　昭和43年10月

「皇御孫命」考―その語義と位置をめぐって―　『藝文研究』第27号　昭和44年3月

競技と童戯　『伝統と現代』第7号　学芸書林　昭和44年4月

折口信夫・歌評以前　『三田文学』第57巻第11号　昭和45年11月

日本人とエロス　『日本人』1　ヴェリタス出版社　昭和46年3月

「関」を形成する文学　上智大学『国文学論集』5号　昭和46年12月

「まれびと」のふるさと　『現代詩手帖』　思潮社　昭和48年6月

新年「囃し詞」の系譜　『芸能』第17巻7号　昭和50年7月（『古代歌謡』〈日本文学研究資料叢書〉、有精堂、昭和60年11月、に再録）

古代研究、日本昔話集成、物語と語り物　『説話文学必携』　東京美術　昭和51年10月（『日本短編物語事典』、東京美術社、昭和59年10月、に再録）

成人祝い　『日本民俗学の視点』1ハレ（晴）の生活　日本書籍　昭和51年10月
口誦と文芸　『ことばの遊びと芸術』　大修館　昭和51年10月
日本人の命名の思想　『言語』〈命名特集〉　大修館　昭和52年1月
担い手の問題　『日本文学研究のために』　新典社　昭和52年4月
『死者の書』論　『国文学　解釈と教材の研究』第22巻7号　学燈社　昭和52年6月
倭建譚の背景　『国学院雑誌』第80巻3号　昭和54年3月
第三節　国語政策、第五節　国語教科書　慶應通信教育教材　『国語科教育法』　昭和54年3月
国文学の発生―「まれびと」の発見、翁の発生―「まれびと」像の軌跡　『折口信夫　孤高の詩人学者　その作品と思想』　有斐閣　昭和54年12月
雛の貝―あるいは、貝姫遊行譚　『三田評論』第804号　昭和55年3月
万葉皇統譜試考―志貴皇子―　『国文学論叢新集2・古代の文学と民俗』　桜楓社　昭和55年10月
平安時代の年中行事と短歌　『短歌研究』第39巻2号　昭和57年2月
東歌の心と祈り　『探訪神々のふるさと9・東国の荒ぶる神々』　小学館　昭和57年10月
風土記、高橋氏文、古語拾遺　『研究資料日本古典文学』　明治書院　昭和58年9月
蘇生譚及び他界相　『国文学論叢新集5・折口信夫まれびと論研究』　桜楓社　昭和58年9月
巻八成立の背景　『上代文学』第52号　昭和59年4月（昭和60年『国文学年次別論文集』上代に再録）
芸能史―師承の学・その展開　『池田彌三郎　人と学問』　慶應義塾大学国文学研究室編　昭和59年7月

鹿鳴譚の由来―古代鹿の文学と芸能―　『金田一春彦博士古稀記念論文集』第3巻　三省堂　昭和59年7月
ことわざ・成句―ことわざ十章―　『美しい日本語講座・ことばの生活II』　NHK学園　昭和60年4月
池田彌三郎記念公開講座「先生の学問」　『魚津シンポジウム』第1号　昭和61年3月
芸能研究目的の模索　『芸能』第28巻第4号　昭和61年4月
芸能史、翁の発生　『別冊国文学・折口信夫必携』　学燈社　昭和62年5月
壱岐の花摘袋　『魚津シンポジウム』第3号　昭和63年3月
「呪言・呪詞」「芸能史」　『折口信夫事典』　大修館　昭和63年7月
対馬の石　『藝文研究』第53号　昭和63年7月
芸能伝承の目的　『民俗芸能研究』第8号　昭和63年10月
『高橋氏文』家職の誇り　『国文学』解釈と鑑賞　第54巻3号　至文堂　平成1年3月
橋の芸文―催馬楽成立小考―　『藝文研究』第55号　平成1年3月（平成1年『国文学年次別論文集』中古1に再録）
境界芸文伝承研究の序　『藝文研究』第58号　平成2年11月（平成2年『国文学年次別論文集』国文学一般に再録）
芸文伝承における性　『文学・語学』第130号　平成3年6月
神代と人倫・第一稿　『三田評論』第941号　平成4年11月
池田彌三郎先生十年祭―霊魂を分与して下さった方々へ―　『三田文学』第71巻31号　平成4年11月

池田先生の学問とその後—霊魂信仰のゆくえ—　『魚津シンポジウム』第8号　平成5年3月
大嘗祭と歌謡及び和歌—『琴歌譜』十一月節を中心に—　『藝文研究』第65号　平成6年3月
薬と古代国文学　『薬・自然・文化』第3号　昭和薬科大学　平成6年4月
神代と人倫　『古代文学講座10』　勉誠社　平成7年4月
倭舞の展開—その意義及び音楽を巡って—　『言語文化研究所紀要』第28号　平成8年12月（平成9年『国史学年次別論文集』に再録）
芸能史及び芸能伝承論　『国文学』解釈と教材の研究　第42巻1号　学燈社　平成9年1月
大嘗祭と歌謡及び和歌2—巳日「御遊」の催馬楽を中心に—　『藝文研究』第73号　平成9年12月
古典における草木花　『人の心と自然環境』　カタログハウス　平成10年4月

〔その他〕

1　編集・編著

池田彌三郎著作集5巻「身辺の民俗と文学」。対談「わたしのフォークロア」　角川書店　昭和54年10月
池田彌三郎著作集2巻「芸能伝承論」、対談「芸能史の制約と組織」　角川書店　昭和55年1月
池田彌三郎『日本文学伝承論』　編集後記　中央公論社　昭和60年6月
折口信夫全集ノート篇追補第1巻「神道概論」。月報「神道概論成稿まで」　中央公論社　昭和62年10月
折口信夫全集ノート篇追補第2巻「言語伝承論」。月報「言語伝承論について—国語史研究の目的—」　中央公論社

昭和62年11月
芸文伝承研究〈池田彌三郎先生十年祭記念論集〉　小集楽　平成4年4月

2　原稿作成
折口信夫全集ノート篇　第13巻　伊勢物語　中央公論社　昭和45年9月
第11巻　万葉集巻十六講義　中央公論社　昭和46年11月
第9巻　祝詞　月報「死者の声」　中央公論社　昭和46年12月

3　評論・書評・解説その他
昭和47年度国語国文学の展望　上代（散文）　『文学・語学』第67号　昭和48年5月
ぷろふぃーる池田彌三郎氏　『歴史と人物』第4巻第5号　中央公論社　昭和49年5月
「日本文学の発生序説」の課題　『日本文学の発生序説』解説　角川文庫　昭和50年9月
柳田国男「分類民俗語彙」書評　『芸能』第17巻2号　昭和51年2月
池田彌三郎『まれびとの座　折口信夫と私』解説　中公文庫　昭和52年4月
池田彌三郎『わが幻の歌びとたち―折口信夫とその周辺』書評　『芸能』第20巻10号　昭和53年10月
梅原猛「歌の復籍」上・下書評　日本経済新聞11月18日（日曜版）　昭和54年11月
ことわざの境遇　池田彌三郎『暮らしの中のことわざ』　旺文社文庫　昭和55年4月

池田彌三郎『行くも夢止まるも夢』書評　『塾』第18巻1号　昭和56年2月
文化功労賞に選ばれた山本健吉君　『塾』第19巻6号　昭和56年12月
舎人の嘆き　『慶應キャンパス』　昭和57年7月15日
随身誄詞　『短歌』第29巻9号　角川書店　昭和57年9月
わが心の風景　魚津青島　『泉』第39号　昭和58年2月
池田彌三郎「芸能・演劇　胎生の場」図版解説　『日本民俗文化大系』第7巻　小学館　昭和59年1月
文化勲章を受章した山本健吉君　『塾』第22巻1号　昭和59年2月
『池田彌三郎　人と学問』年譜　昭和59年7月
池田彌三郎『日本文学の〝素材〟』書評と紹介　『芸能』第30巻10号　昭和63年10月
愛　師弟と友人と　『三田文学』第68巻18号　平成1年8月
池田彌三郎〈人物史・芸能研究の昭和（一）〉　『芸能』第31巻10号　平成1年10月
折口信夫の世界「三田の万葉旅行」（7回）　『芸能』第32巻11号～33巻5号　平成2年11月～3年5月
昭和三十六年のこと〈追悼―遠藤周作―〉　『三田文学』第76巻48号　平成9年2月（平成10年4月『遠藤周作のすべて』文春文庫に再録）

4　座談会

民俗芸能と性（西角井正慶氏・郡司正勝氏・田原久氏・山路興造氏と）　『民俗芸能』第36号　昭和44年4月

『池田彌三郎著作集』をめぐって（安藤伸介氏・松原秀一氏・若林真氏と）　『三色旗』第379号　昭和54年10月
追悼　池田彌三郎の学問（加藤守雄氏・三隅治雄氏・安西英太郎氏・若林真氏と）　『塾』第20巻6号　昭和57年12月
芸能伝承―民族と芸能―（加藤守雄氏・三隅治雄氏・仲井幸二郎氏と）　『三田評論』第889号　昭和63年2月
民話とその周辺（君島久子氏・沼田曜一氏と）　『三田評論』第911号　平成2年2月
桜を愛でる（黒河内清氏・工藤園子氏と）　『三田評論』第990号　平成9年4月

〔口頭発表・講演〕

上代関についての一考察　上代文学会　於慶應義塾大学　昭和35年5月
筋馬考　国文学研究会　於慶應義塾大学　昭和40年6月
皇御孫命の語義と位置について　国文学研究会　於慶應義塾大学　昭和43年6月
関を形成する説話の形　説話文学会　於慶應義塾大学　昭和46年5月
とこよ及びよろづよ　地人会　於慶應義塾大学　昭和51年11月
万葉集はいつ出来たか（中西進氏・山口博氏と）　上代文学会　於早稲田大学　昭和58年11月
対馬の石　国文学研究会　於慶應義塾大学　昭和62年11月
壱岐の花摘袋　地人会　於慶應義塾大学　昭和63年1月
芸文伝承における性　全国大学国語国文学会　於いわき明星大学　平成2年10月
神代と人倫　国文学研究会　於慶應義塾大学　平成4年6月
節会と歌謡及び和歌―『琴歌譜』十一月節を中心に　和歌文学会　於慶應義塾大学　平成4年10月